

微生物資源シンポジウム報告

平成 27 年度微生物資源シンポジウム 「きのこ類のもつ様々な機能性とその活用」

コンビーナー 前川二太郎
(鳥取大学農学部附属菌類きのこ遺伝資源研究センター)

我が国には多様なきのこ類が分布し、現在およそ 6,000 種が知られている。しかし、いまだ多くの未同定種とともに未報告種が分布しているものと考えられ、国内に現存するきのこ種は 10,000 種を越えると推定される。これらのきのこ類の中には、食用のほか、有用な生理活性物質等の生産や機能を有する種が多く含まれている。このようなきのこ類は、地下資源に乏しい我が国にとって貴重な生物資源であるといっても過言ではない。きのこ類遺伝資源は栽培きのこ種の新品種開発や新規栽培きのこ種の開発等の食用としての資源のみならず、新規生理活性物質生産菌や環境汚染物質分解菌などの探索源として、さらに、菌根性きのこ種を用いた有用植物の増殖技術や緑化技術の開発など、今後のきのこ類遺伝資源の多面的活用が大いに期待される。

日本微生物資源学会第 22 回大会が開催された鳥取市には栽培きのこ類に関する基礎から応用研究を推進している一般財団法人日本きのこセンター菌茸研究所がある。さらに、大学としては唯一きのこ類を主とする菌類の網羅的な教育研究を行っている鳥取大学農学部とその附属施設の菌類きのこ遺伝資源研究センターがある。鳥取大学農学部は前身である鳥取高等農業学校（1920 年設立）時代からきのこ類の分類や栽培等に関する研究を長年に渡り断続的に取り組んできた。また、菌茸研究所では主にシイタケをはじめとする栽培食用きのこの品種開発、栽培技術の確立等の研究を 50 年以上に渡り行っている。

きのこ類の研究において深い縁のある鳥取市で本大会が開催されるにあたって、きのこ類に焦点をあて、主要な栽培食用きのこであるシイタケ遺伝資源の多様性と品種開発、マツタケに代表される菌根性きのこ種の栽培化に向けた取り組み、木材腐朽性きのこ種が持つ有用分解酵素の探索、およびきのこが生産する物質の植物病害防除への利用に関する研究の 4 つの講演からなるシンポジウムを企画した。各講演の詳細については、ご講演いただいた先生方が取り纏められた解説文をお読みいただきたい。最後に、講演依頼に対して多忙にも関わらずご快諾いただいた先生方および本シンポジウムに参加いただいた皆様に心からお礼申し上げます。

概要

大会名：日本微生物資源学会第 22 回大会

日 時：2015 年 9 月 10 日（木）13：00-15：10

場 所：鳥取県鳥取市・とりぎん文化会館第 1 会議室

13：00-13：10 シンポジウム開催にあたり 前川二太郎

13：10-13：40 S-1：シイタケの遺伝資源と品種開発

寺島和寿（一般財団法人日本きのこセンター菌茸研究所）

13:40-14:10 S-2: マツタケなど菌根性きのこ類の人工栽培に向けた研究

山中高史 (国立研究開発法人森林総合研究所)

14:10-14:40 S-3: きのこと由来揮発性物質を利用した植物病害防除技術の開発

大崎 (岡) 久美子 (鳥取大学農学部)

14:40-15:10 S-4: キノコやカビの酵素探索からの或る考察

紙野 圭 (独立行政法人製品評価技術基盤機構バイオテクノロジーセンター
産業連携推進課)

(敬称略)